

私たちに残してくれたもの

多摩市立多摩第二小学校 6年 伊藤 結愛

私は広島に行って知りたいことがありました。それは、「広島の人々はなぜ、見ることに辛いはずの原爆ドームを、未来に残してくれたのか」ということです。原爆の悲惨さを伝えていくためだと聞いても、恐怖を思い起こさせるあの姿を目にする度、何度も打ちのめされることは、きっと耐え難いはずです。本や資料だけでは分からない広島の人々の思いを知るために、広島へ行き、答えを見つけたいと思いました。広島で私がまず学んだのは、写真や映像をただ見るだけで通り過ぎていた物の、一つ一つの意味です。平和記念公園にある全てに、沢山の痛みと祈りの物語がありました。佐々木禎子さんの、生きたい思いを込めた事が伝わる、美しく折られた折鶴。被爆を生き抜き、人々に生きる勇気を与えたアオギリの木のたくましさ。より分かりやすく伝えようと、十二年をかけて改装した平和記念資料館の、大切に展示された遺品の数々。実際に目にして伝わる痛みは、はるかに重く感じました。それと同時に、丁寧に原爆の爪痕を伝え、私達の心に届けようとする思いも感じたのです。八月六日、国を越えて、立場を越えて、年齢も越えて、平和を強く願う人々の姿を目の当たりにしました。それぞれのやり方、それぞれの言葉で平和への思いを表現していました。多くの方が、平和について共に考えることができる場所、それが広島なのだと思います。そして、原爆による被害は、長く深く人を苦しめることを、朗読会で学びました。自分が痛くて苦しくてたまらないのに手当てをしてくれた親を、炎の中に置いてきてしまった後悔。自分の死を覚悟し、お弁当をくれた少女が息を引き取るのを、ただ見てるしかなかった無念。そして心ない人達からの差別。聞く側も話す側も、胸がしめ付けられる程のこの体験を口にすると、思いだす記憶に、何度も傷ついたはずですが。それを伝えてくれたこの意味を、私は自分の見てきた広島を通して考えました。

そして、自分なりに知りたかった答えを見つけました。それは、幸せの大切さを誰よりも知っているからではないでしょうか。私達の毎日がどれだけ幸せか、それを守ることの大切さを、奪われる経験をしなければ本当に気づけない事だからこそ、今なお傷ついても立ち上がってくれたのだと思うのです。自身の体験を語らなかつた田頭数蔵さんが、「ICAN」と名づけたバラに平和の祈りを込めたように、たとえ語ることが出来なくても伝え続けるために、原爆ドームを残してくれたはずですが。戦争をする時、人は色々な理由を言います。正義だという人もいます。くにたち原爆体験伝承者の天野さんが伝えてくれた被爆者の平田忠道さんの言葉にこうあります。「戦争にやっつけていい戦争は一つもない。」と。武力や核兵器で戦うのではない、私達の戦い方がある。広島の人々の経験が、幸せを守る私達の背中を押してくれる、何よりも強い武器なのです。私は伝え続けていく、広島の人々が願う未来のために。